感嘆から憧憬へ

格言集

哲学・科学・宗教の関係

ジャネル・タスラマン

ハサン・オナト先生と弟エムレ・エクシへ捧げる

目次

序文 / 4

創造 / 5

神と人間の関係 / 10

イスラムとクルアーン / 16

存在 / 24

科学・哲学・宗教 / 31

その他 / 39

序文

学究生活を通して、自著や科学会議での発表、出演したテレビ番組やラジオ番組で意見を述べ、伝えようとしてきた。その中で私が書き記し、発言した多くの言葉（格言）をソーシャルメディアなどを通じて私自身や他の人々が共有した。共有するうちに、私の格言に関心を抱き、それについて討論する人々が現れたことに気づいた。出会った多くの人が、私が発言した一言を取り上げて何を言わんとしているのかと尋ね、意見を述べ、その一言に感化されたと言う。こうしたことをふまえ、格言を一冊の本にまとめて読者に捧げることにした。

筋の通らない飾り立てた言葉は、空虚なレトリックである。

私は自分の考えの根拠を明らかにし、意見の理由を明言できる哲学者たらんとしてきた。私が思うに、筋の通らない格言を述べることはその人の深刻な欠点である。私は本書の格言で明示する見解の根拠を自著や会議、テレビ番組やラジオ番組で裏付け、擁護してきた。格言を述べる者は、その言葉の根拠を裏付けることができればこそ、それを述べるにふさわしい者たり得る。短い言葉で本質をつく格言は、それが示す考えに対する問いかけに答えるほど長くない。そうした問いかけをして私が格言で何を述べようとしているか詳しく知りたい方々は、まずその格言に関する私の本を読み、その後でその格言のテーマに関して説明をした私の討論を聞いていただきたい。

多くの友人が貴重な提案や批判をして本書の出版に貢献してくれた。その中に（アルファベット順に）エムレ・ドルマン、エニス・トクギョズ、フルカン・オズチェリク、メルヴェ・バルバイ、ターハー・アイフェル、イート・ヤヴズ、アイドアン、そして全ての段階で貢献してくれたイスマイル・オズジャンがいる。皆に大きく感謝している。本書を手に取っていただいた読者の方々にもお礼を申し上げる。意見、批判、提案は、私のウェブページ www.canertaslaman.com からお寄せいただきたい。

創造

神は、作品をすばらしいものにするために経費を一切惜しまない芸術家のようである。だからこそ、何百万という生物、何百万という星が存在している。

創造の見事さを示すために何百万という生物の種類が創造されなければならないのであれば、力も源も無限であり、どれほど創造しても自らからは一切欠けるもののない神が創造する。それこそが、宇宙にある何千兆という星と、指先にある何千兆という原子の秘密である。

宇宙の始まりの爆発は、どうしたらバッハに音符を、レンブラントに色彩を、ニュートンに数学を贈ったのだろうか？

あなたがあなた自身のものだというのなら、人間よ、あなたは心臓の鼓動すら思い通りにできないのに、あなたの知性はどうやって星々に至ったのか？

神は全ての設計の永遠の主である。神は創造する設計者であり、科学者と芸術家は発見する設計者である。

神は見えないが、全ては神によって見えるようになった。

私は自分を知れば知るほど、私より「遥かに偉大な者」が私を創造したことが一層よくわかる。

人間を創造した者は、創造の秘密を自らが創造したものの本質に据えた。

秘密を解き明かすこととは、唯一のごまかしを取り除くことにかかっている。それは「偶然」である。

全宇宙が相対的に 1 兆分の 1 に縮小されたとしても、私達はそれに気づかないだろう。では私達は、大きい、小さい、という問題をなぜ誇張するのか？

全てを神が創造したことを知らない者は、何とよく「私が」「私の」と言うことだろう！

衛星波が多くの場所を貫くということを理解できる者が、神が全てを貫くということを理解できないことは、当を得ているだろうか？

知性における自然の存在的地位を「創造するもの」から「創造されたもの」に引き下げることは、自然の美、意味、価値を遥かに高めることである。

星の粉塵から地球を、地球の土から私達を創造した主よ！あなたの愛で私達の心を満たして下さい！

私達を無の暗闇から存在へと引き出した慈愛深き神よ！死の扉を潜った後に私達の存在が天国で続くよう、あなたに希います。

奏でられる音楽は、そのどれもが、神が宇宙に据えた可能性が迸っているものである。

なぜ自然は、神がいればこそ「合理的な根拠」を持つ生来の道徳的特徴を形成しているのか？

私にとって懐かしい芸術家とは、身震いさせ、驚愕させ、魅了し、そして「偉大な芸術家」へと導く道標となる者である。

物質が創造された要素でなかったとすれば、神の目的のために望まれたとおりに用いられる、これほどまでに精巧な僕にはなり得なかった。

クルアーンは、被創造物への驚愕の念を起こさせ、そこから創造者への憧憬の念を抱かせる懸け橋を築く。

もし、ハムレットの「存在するかしないか、それこそが問題だ」という台詞を、唯物論哲学のイデオロギーが自らの哲学を表現するために模倣するとすれば、おそらくこうなるだろう、「宇宙は永遠であるかないか、それこそが問題だ」と。

宇宙から私達への最も重要なメッセージは、創造し、偉大であり、叡知を持ち、意識を持つ唯一の神の存在である。

相互のレベルに引き下げられることのない、様々でごく基本的な欲求の全てが一様に神の存在を必然的にしていることの最良の説明は、それらの欲求が神によって人間に据えられたというものである。

神が宇宙を超越し宇宙の全ての場所に介入していることを信じる人にとって、時を超越する神が時の全ての瞬間に介入することを把握するのに問題はないはずである。

私達がこれほどまでに脆弱でありながら、何十億年もの過去に起きた過程、そして何十億キロメートルも離れた場所で起きている過程を発見することができるのは「幸福な偶然」によるものだと言うことは、全くもって満足できる説明とは考えられない。

宇宙は、宇宙にある潜在性と原材料を用いて宇宙を発見することができる道具を私達が作ることをどう可能にしているのか？

なぜカオスではなく、自然法則が存在するのか？

なぜ自然法則は、宇宙で観察される設計とあらゆる種類の生物の出現を可能にする形なのか？

全宇宙は自然法則に従って動くが、宇宙についての全てを説明することは自然法則を超越する。

全てのものが機械的な粒子で構成されているのなら、目的を持つ人間の意識はどう現れたのか？

私達が生きる宇宙の潜在性にこれほど大きな多様性、美しさ、味、そして理性が秘められていることは、どう説明できるだろうか？

私達が何の努力も払うことなく、この宇宙における最もすばらしい要素である意識と自我を備えていることは、最も深慮に値する現象ではないだろうか？

神の意志と叡智の多くを理解できない理由の一つは、わずかな時代にしか目を向けず、神の創造の全てを知らないことにある。

宇宙の始まりに何十億度という熱の中で飛び散った素粒子を想像し、想像しながら音楽を聞き、美しい風景を眺めながらお茶を飲んでいる人は、聞いている音楽、眺めている風景、飲んでいるお茶が、宇宙の始まりの潜在性の中に在り、用意されたものであることを考えると、宇宙に在ったこの潜在性が偶然でないことを感じ取る。

始まりを創造した神が、この始まりにあったあらゆる潜在性を知らずにいると考えられるだろうか？

私達の家と持ち物が一瞬にして消えず、私達が座ったときに体の原子が椅子の原子と混じり合わず、歩みを踏み出すと常に前進でき、体が養われ存在しているのは、自然法則が常に守られているおかげである。

神と人間の関係

生まれると同時に私の砂時計は逆さまになった。主よ、あなたに会うまで何粒の砂が残っているのだろう？

神、ただ、神。無限の力と叡智を持つ神。私の存在の理由であり、人生の意味であり、祈りを捧げる相手、私の主、私を救う、神。

人に好かれたいという欲求は、神に好かれるために与えられたものである。他の者に好かれないという懸念を理由に神から遠ざかるとは、何という矛盾であろうか！

最も重要である神によって創造された人間にとって、神との関係を築くこと以上に重要なことはあり得ない。

あなたに全てを与えた者に、全てを与えよ。

神を持つ者は、何も持たずとも豊かである。神を持たない者は、全てを持っていても貧しい。

常に神の前にいることを知ることの幸福は、全世界の財産を持つことの幸福よりも優れたものではないだろうか？

人生は空しいという錯覚から救われるのは、どこもかしこもが神で満ち満ちていることがわかったときである。

神を持たずに生きることは、表面的で、つまらなく、不十分で、無価値で、醜く、無意味である。

神よ！私の頭からあなたへの思考を、耳からあなたへの唱念を、体からあなたへの方向を、胸からあなたへの愛を取り除かないでください！

神との繋がりがないものは全て費える。費えるものは全てつまらないものである。

神に敵対する者は、神がいないことを他人に信じ込ませることで神を無きものにできると思い込んでいる。

心は、心を与えた者に開かれるよう与えられた。**「心は神を思い起こすことでのみ満たされる」**（クルアーン：雷章 13-28）

神のあらゆる叡智が私達の知り得るものであったなら、神を信じ、頼るということに何の意味があるだろうか？

神との関係を築くことから逃れる者は、自分の欲求の虜になることからは逃れない。

最悪の災いにすら屈せずに言おうではないか、**「我々は神のものであり、かれのもとに還る」**（クルアーン：雌牛章 2-156）と。

主を知らない者は、欲望に限界を据えることができない。

神が与えた口で神を唱念することを恥じるというのは、一体どういうことなのか？

目に見えるものを拠り所とするのでなく、見えることを授けたものを拠り所とせよ。

自分の存在を神に捧げることでのみ、自分の存在を豊かにすることができる。

意味、深さ、癒し、そして決して揺さぶられることのない礎を求める者にとって、クルアーンのこの節は十分でないだろうか？**「神は、被造物にとって十分でないか？」**（クルアーン：集団章 39-36）

神がいればこそ、意味、正しさ、善、美がある。神を否定する者にとって、それらはただの幻である。

問うに値する全ての問いの答えは神である。

欲求、痛み、幸福、希望、恐れ、認識、感覚から、神へと開かれる扉がある。開くことができる者は何と幸せなことか！

神が永遠の統治者であることを知る者にとって、絶望は無い。

為事は、神に向かう側面があればこそ、価値あるものになり得る。

名声を得ようと、儚い人間の頭の中にある「スーパースター」になろうとするのでなく、神の永遠の知性にある清廉潔白な人間になるよう努めよ。

世界中から最も好かれる人物になるよりも、100 分の 1 でも神からもっと好かれる人物になる方が遥かに重要である。

祈りは、神の知らないことを表現することでなく、自分が何であるかを示すことである。

私達は神の許しを請うていながら、仕事に関して人を許すとなると、何とよく物惜しみすることだろう！

暗黒の時代に生きることは、テレビ、車、パソコンを持たないことでなく、神を持たないことである。

神の存在は、数多くの事象のうちの一つに過ぎないのではない。全てを根底から変える真実である。

人間に生まれつき備わった正義への欲求は、人間の目を来世に向けさせる。来世が存在し得ることは人間の目を神の存在に向けさせる。

何と甚だしい矛盾だろう！信仰する人々はまるで神を信じていないかのように無頓着であり、信仰しない人々はまるで神を信じているかのように呑気でいる。

神の叡智は、それが神の意図した事柄に影響を及ぼすときに神の支配と意志にとっての限界とみなされないとすれば、神の善性も、神の意図した事柄に影響を及ぼすときに神にとっての限界とはみなされない。

幸福は神へと歩ませ、痛みは神へと駆けさせる。

無知性でなく、高まる知識によって神の叡智と力が見えてくる。

神は人間を、神と神が送る宗教を必要とする形で創造した。人間の本質（フィトラ）はそれに従って設計されている。

「神は全てのものより重要だ」と言うのなら、神のために財産、時間、評判、家族友人、命を諦められることを見せよ。

存在すること、存在を授けてくれた者を知ることはすばらしい！その並々ならぬすばらしさに飛び跳ねず、感動せず、この真実以外の全てが空虚であることがわからないなら、私達は無知の中で阿呆になっているのだ。

神の叡智という観点から可能であるいくつかの選択肢の中からどれを選ぶのが適切か知ることができないとき、神がその中からどれを実現させているかという問いに「知らない」と答えることこそ最も理に適っており、神学的にも最も適切である。

真の勇気が平安を得るのは、神に出会うことの幸福の中で死の顔に向かって笑むことができたときである。

神が存在するかしないかについての決定は、自分自身、家族友人、世界、そして全ての存在物に対する視点を覆すほどの重要性を持つ。

姦淫、豚、不寛容、陰口を避けることは、それらを捨てるだけでなく、誰が主で、誰が被創造物であるかを知るということの問題である。

信仰心が真実かどうかは、好きな物事を諦めなければならないときに明らかになる。

希望を抱く理由は、全てがより良くなることでなく、全ての背後に神の叡智があることを知ることにある。

イスラムとクルアーン

イスラムはただの一真実ではない。あらゆる種類の真実を真実たらしめる真実である。

健全な宗教的理解が発達するには、感情も理性も強くならなければならない。

クルアーンは理性を神格化しないが、理性の働きが宗教に奉仕することを示す。

クルアーンが最大の真実、あるいは最大の嘘であることを、無宗教者ですら認めざるを得ない。クルアーンは決して平凡なものでない。

目と頭で認識するあらゆる存在物に神の存在を示す証を感じ取り、見い出し、称え、感謝する。クルアーンは、そのような知性を築く。

クルアーンは、存在する全てのものに神の芸術と力を見い出す知性を築きつつ、どこにいようと、神の存在を感じ取り、人生の全ての瞬間に神を受け入れることを可能にしてくれる。

もし欲求と習慣がクルアーンと対立するのであれば、クルアーンを欲求と習慣に合わせるのでなく、欲求と習慣をクルアーンに合わせよ。

クルアーンは、あり得るか、あるいはあり得ないかについて提案した。何をしようとも、この提案を無視することはできない。

クルアーンに記された超越的な文言と同じように、クルアーンが啓示された時代と環境に受け入れられていた誤った物事がクルアーンに記されていないことも重要である。

クルアーンは、神によって啓示されたために人間を超越しているが、その言葉、文字、文によって人間のためのものとなっている。

クルアーンは、自力で無を超越することができない脆弱な人間に、あらゆる苦悩を消し去る力を手にした創造者との繋がりを築かせつつ、「地上における神の糸」としての役割を果たす。

イスラムは、現世の利益に基づく目標を克服させてくれる存在認識と来世の認識を与える。

イスラムが神から送られたものであるということは、創造者との繋がりを築くことができる可能性があり、人生に意味があり、死が自分にとっても愛する人達にとっても終焉でなく、死後にこの世でしたことについて審問を受け、死後に愛する人達と巡り合える可能性があるという意味である。これ以上に重要で、これ以上に衝撃的で、これ以上に驚愕的なことがあるだろうか？

クルアーンの文言から、預言者ムハンマドが偶像崇拝者達と和議を結んだことがわかっている。ムスリムが対話し得ない「よそ者」はいない。

イスラムは「元になる物事」がない多くの戦争で「駆り出す」要素として道具にされた。

無知無学ではなく教育を、無味さではなく審美を、身勝手さではなく連帯を、破門ではなく共通の礎を共有する努力をいち早く発達させなければならない。

宗教の核心的な秘密は試練である。試練は意志があればこそ、意志は悪があればこそ意味を持つ。

クルアーンは理性にも感情にも語りかけ、意味、善、正しさ、美しさについて人間の本質（フィトラ）から迸る叫びに不死の水を与えてくれる。

イスラムを、勇気、道徳、正義、礼拝、断食、喜捨なくして実践することはできない。

クルアーンは、眠りを誘う旋律でも、そよ吹く風でもない。クルアーンは、活力みなぎる歌であり、迷信を打ち払う大嵐である。

人生観をイスラムに従って問いたださず、イスラムを人生観に従って問いただす者は、車両に機関車を引かせようとしている！

どの断食も、恵みを授けてくれる者が神であるという信仰を新たにする。神が望んで初めて、神が授ける恵みを享受することができる。

ムスリムのジハードは、相手への憎悪でなく、神への愛に基づくべきである。

クルアーンに自分の考えを言わせるためでなく、クルアーンを理解するために能力を使うべきである。

被造物である人間は、啓典が神から送られたという認識に至ることで、その啓典と一定の関係を築かざるを得なくなる。この関係を然るべき形で築けないのは、神についての認識あるいは被造物としての認識が脆弱であることを示す。

クルアーンの「意図的な沈黙」を理解できない者は、無意識的に多くの事柄を宗教に付け足した。

最大の問題の一つにパッケージプログラムがある。多くの人が、誰か一人を礼賛し、どんな事柄についてもその人物に盲目的に従っている。そうではなく、物事をクルアーンと理性に基づいて一つ一つ吟味する方法を普及させなければならない。

信心深い人々は現世で来世を、宗教で儲ける人々は来世で現世を勝ち取ろうとする。

イスラムは、意味（存在的な叫び）、善（道徳的な叫び）、正しさ（理性の叫び）、美しさ（審美感の叫び）に応え、その全てに同時に礎を与えてくれる。イスラムが与える礎において為すに値すること（有意なこと）は、道徳（善）、智恵（正しさ）、魅力（美しさ）と共存する可能性を持つことができる。幸福な共存とはまさしくこのことである。

神の崇拝は、実践されるだけでない。神の崇拝は、私達を私達たらしめる。

イスラムは世界を過小評価するのでなく、むしろ一層意味あるものにする。

私達が財産、家族友人、命によって試されることはクルアーンで伝えられている。なぜ試練に遭うたびに、針にかかった魚のようにじたばたするのか？

クルアーンは、人間の絶望、弱さ、模索、祈り、涙、心の底から迸る問いかけの答えである。

道徳の究極的な礎は、最良の形で神の善性に見い出される。これは、神を「善なるもの」として紹介する宗教こそが受け入れるに値する宗教であることを示す。イスラムはその条件を満たしている。

私達は天国にいながら天国を地獄にしているか、あるいは地獄にいながら地獄を天国にしている。イスラムが正しければ前者が、誤っていれば後者が正しい。

神が私達の内側に据えた最も重要な模索に答えるもの、それがイスラムである。

伝統主義は古いものを真実、モダニティーは新しいものを真実と混同するという過ちを犯している。双方の災厄を免れるためのムスリムにとっての試金石はクルアーンである。

知識人や思想的リーダーがいるのは普通であり、さらには必要なことである。しかし、言葉や意見の正しさは、それを述べた人物によってでなく、その内容によって明らかにされる。問題なのは、誰かを聖職者に祭り上げ、その人物の発言の内容を分析することなく、その者に知性、心、財布、貞操を盲目的に捧げることである。

クルアーンの定めを吟味するときは、その定めを実践するごとに及ぶ特定の影響よりも、実践することでどんな時にも及ぶ全ての影響に目を向けなければならない。

イスラムは、脆弱でいることでなく、脆弱でいる状態を改善することを神聖視する。

理性を超越する事柄を内包しつつも理性と矛盾しない宗教こそが、信じるに値する宗教である。

信じるに値する宗教からは、理性を神格化しないが、理性が宗教に貢献することを伝えることが期待される。

クルアーンの文言は、宗教的信仰と行為に「真の意味」があることを保証する。クルアーンは人間のためのものなので、この「真の意味」を理解するための理に適ったアプローチを発達させることが必須である。しかし、人間的な解釈が神の啓示のように保証されたものではないことを忘れてはならない。

宗教は神の啓示の産物であり、啓示から結論を出す神学は人間の産物である。神学においては、人間の社会的条件、偏見、アプリオリな受容事項、概念的・能力的欠陥などの限界に遭遇する。

神のイスラムとは、世界の変化に従って変わるのでなく、世界を変えることを謳うイスラムである。

「啓示されたイスラム」と「受容されたイスラム」の違いを明らかにすることは、「イスラムとは何か」の問いに答えるために極めて重要である。

神は、人間への自らのメッセージを込めたクルアーンに、時代を超越する記述や例を据えており、そうすることで人間が、クルアーンが神から送られたことの証拠を知ることができるようにした。

核心的な問題は、歴史上ムスリムが何をしてきたかではなく、イスラムとは何であるかである。

社会が形成した理性をクルアーンによって修正するのでなく、クルアーンを社会が形成した理性に従わせることは、クルアーンは神から送られたものであるという意見と矛盾する。

クルアーンは、理性をものまねから救う道具、ものまねをイスラムの本質から遠ざける敵として定義する。今日、イスラムをものまねの宗教にしようとする者は、その矛先を、知性と知性の洗練された応用である哲学に向けている。

人間が神からの道徳的命令に基づいて創造されたことと、神からの道徳的命令を伝えるものとして宗教以外の体系を示されないことは、人間が、創造者によって、創造者の道徳的命令を伝える宗教に従うよう創造されたことを意味する。これは、人間の本質（フィトラ）は宗教に基づいて形成されたという意味を持つ。

水への欲求は、水の存在が必然的なものであることを示すが、水不足で死なないことを保証するものではない。同様に、最も深い欲求は、神が送った宗教の存在が必然的なものであることを示すが、この宗教を全ての人が信じることを保証するものではない。また、自然な欲求である喉の渇きを満たす水が重金属によって人間の手で汚されることがあるように、自由意志を持つ人間が神の送った宗教を汚し、害することもある。

神が人間の創造の本質（フィトラ）に据えた特徴が宗教を必然的なものとして示していることは、神が人間の目を宗教に向かわせていることを意味し、神は確かに宗教を送ったという見解を、神は宗教を送らなかったという見解よりも合理的なものにする。

生まれつき備わった道徳的特徴は、鍵穴のついた扉のようであり、その扉を開く鍵は神の命令である。この鍵穴にこの鍵が必要であることは、その鍵が存在することの証である。イスラムは、その鍵の名である。

理性について考える人は、理性だけで「私はどこから来たのか」「どこへ向かっているのか」などの最も核心的な問いの答えを見つけることはできないが、理性を超越するこうした問いに答えることが可能な、創造者の答えを秘めた体系（宗教）を介してこうした問いの答えが見つかることも理解する。

イスラムは、創造、現世、試練、来世の繋がりを築きつつ、絵の全体を見て取らせ、その枠内で創造が「意味を持つ」ものであり「美しい」ことを把握させ、私達の眼前にあるものが騒音ではなく音楽であり、飛び散った絵具ではなく絵であることを理解させてくれる。一部の人々にとって、イスラムの視点は、騒音を音楽、飛び散った絵具を絵と思い込むという浅はかさであり、ロマンチシズムである。イスラムでは、音楽を騒音、絵を乱雑に飛び散った絵具と思い込むこと、美のすばらしさや感動を認識できないことは、心が固くなり、耳が聞こえず、目が見えていないということである。

イスラムは、創造者と被創造物の間の繋がりを示し、私達の目に映る世界が騒音でなく音楽、飛び散った絵具でなく絵であることを把握させてくれる。

存在

私達は、永遠の中に置かれた点ほど脆弱であり、そして、点でありながらも永遠を見い出すことができるほどの能力を備えている。

意味も、善も、正しさも、美しさも私達を惹きつける。なぜ？どこへ？

現世の為事で先を行く者を見て羨み、来世の為事で後れている者を見て怠ける者は、現世の為事で後れている者を見て感謝し、来世の為事で先を行く者を見て努力すべきではないだろうか？

現代の現世的な秩序は、快楽的な華麗さを持つものの表面的であり、人間の本質（フィトラ）の最も深い叫びに答えることはできない。

全てが無意味だというのなら、精神はなぜ「意味を」と叫ぶのか？

来世を信じない者にすれば、煌びやかな演劇が開幕したと思いきや、幕は一瞬にして閉じる。それが全てだ！

現代人は快楽に魅了され、野心で呆け、驕りで盲目になっている。

不信仰者は、自分の価値が驕りによって高まり、神との繋がりを築くことで下がると思い込んでいる。ムスリムは、自分の価値が神との繋がりを築くことで高まり、驕りで下がることを知っている。

最後の命が引き渡され、最後の星の光が消されたときに重要であるものが何であれ、それこそが今も重要である。

理性で燃え上がる感情、感情で育まれる理性が必要である。

満足を最大限に高めようとする資本主義の努力も、欲求を最小限に下げようとする仏教徒やスーフィーの努力も、人間の創造性に適した解決を示さない。

人間は抑圧される者にも抑圧する者にもなってはならない！しかし、来世の審問を知る者にとって、抑圧される者になる方が抑圧する者になるよりもいい。

自らの存在を無に帰すものの上に築くことは、何と甚だしい愚かさであろうか！

もし全てが無意味だとすれば、「意味」という概念は在り得るだろうか？

生まれる者は皆、死によって吉報を受ける。多くの者は、死よりも速く走れると思い込んで逃げる、逃げる、逃げる、逃げ、逃げ、逃…。

私達は、存在していることがいかに並外れたことか、万物がいかに壮大であるか、被創造物がいかに美しいかを感じても心躍らないのなら、恥を知るべきである！大空、海、木々、鳥、蟻の声が聞こえないなら、耳が閉ざされているのではないだろうか？

世界で勝者のように見える者を見て嘆いてはならない。思い出してほしい。預言者ユスフの兄弟はユスフを井戸に落とし、ユスフは牢獄に繋がれたが、勝者はユスフであった。

人は、与えた分だけを得ることができる。

命をかけ、投げ打つに値する真実は、イスラムによって人生に織り込まれる。

この世の人生に限って見れば、死は、羊、ハエ、ノミと人間を平等にする。

死を亡き者にして不死にはなれない。死の主に向かわずしては。

知性は足の前を、足は今を歩む。今の快楽が知性を麻痺させていても、足がその前を歩んで死を見据えることのできる知性にとって、その快楽は意味をなさない。

死と出会った後、王と農夫は平等になり、名声が残すものは何もない。
死と出会った後、大富豪と破産者は平等になり、来世への銀行送金も権利証書の移転もできなくなる。
死と出会った後、カサノヴァとノートルダムのせむし男は平等になり、土が呑み込んだ体から欲望に満ちた瞬間の思い出はすべて消え去る。
死が刻々と近づいていることを知っている者は、富・名声・欲望が残すものが何もなく、富・名声・欲望への投資が、やがて破産することが自明な会社への投資と違わないことを知っている。

道徳を実践するとき、実践されるルールが正しいかどうかと同じように、ルールを課す者が誰であり、実践する者が誰であるかも重要である。

人間は、現世を失いたくがないために死について考えないが、死について考えないがために来世を失っている。

時の速い流れは、幸福も悲しみも無意味なものにしており、「時を超越する者の他に真実はない」と言っている。

時は快楽の敵であり、痛みの友である。

何もかもがすばらしいか？悪い知らせがある。それは過ぎ去る。

何もかもがひどいか？良い知らせがある。それは過ぎ去る。

快楽を追い求める者は意味を失い、意味を追い求める者は快楽を捉える。

今自分が死んだと考えてほしい。あなたは過去にどんな人生を送りたかったと思うだろうか？過去にどんな人生を送りたかったと思うにせよ、今をそのように生きよ！

誰でも、自分がいつか死ぬことを理屈の上では知っているが、生きている間、まるで決して死なないかのように、死が嘘であるかのように生きている。死を無視すれば死も自分を見ることはないと思い込んでいる。しかし、死の目は誰よりも鋭く、その歩みは誰よりも速く、その決意は誰よりも強い。

神が私達を意味を求める形で創造したこと、イスラムが私達の存在に内在する意味の模索に最良の答えを示すことは、イスラムが神から送られたことの証である。私達の存在に内在する意味の模索のための鍵穴を開ける鍵は、イスラムである。

注意してほしい。私は「無意味性から解放されるためにムスリムになろう」と言っているのではなく、「神は私達を意味を必要とする形で創造しており、イスラムは意味の模索に満足できる答えを示す。つまり、神は私達を意味の模索を介してイスラムへ導いており、それはイスラムが、私達が従うよう神が望んでいる宗教であることの証である」と言っているのだ。

智恵の高まりは私達の力を示すが、同時に私達がいかに脆弱であるかをも声高に伝える。

「なぜ私はここにいるのか？」という叫びは明確だが、多くの人はこの叫びに耳を塞ぐ。しかし、これは避けるべき叫びではなく、抱擁すべき叫びである。

神の存在を理解することで現れる違いは、生まれつき見えない者が見えるようになることで現れる違い以上に大きい。

「なぜ私達は、正しいことも誤ったことも、自分の意志で選択できるようになっているのか？」と自分の存在理由を問いただそうとする者にとって、桁外れに重要なこの問いにイスラムが示す「試練のため」という答え以上に良い答えはない。

宇宙についての視点は、宇宙の一部である自分自身についての視点も明確にする。

人間の中にこれほどの脆弱さとこれほどの能力が共存しているのは何と不思議なことだろう！鼻水が出るのに太陽黒点の計算ができ、トイレも我慢したいだけ我慢できないのに月に探査機を送ることができる。自分がいつ死ぬか知らないのに、何十億という数字の計算ができる。

目的を知りたいという欲求が神の存在を必然的なものにするように、神が、私達の目的が何であるべきかを告げるメッセージがあることも必然的なものにする。

人間は、他の生物と違い、遥かな昔、そして遥かな未来との関係を築くことができる。生きることへの内なる欲求から未来について考える人間が来世の生活を望むことは避けられない。

私達を私達以上に知り、私達自身を含む全ての人が私達を誤解するとしても、私達を決して誤解することのない偉大な創造者ほど、存在を豊かにするものがあり得るだろうか？

信仰は、大勢に対抗するための燃料である。

宇宙に終わりがあることは、一部の人にとって存在的な危機の源である。多くの人は、死への慰めをこの世に残す作品、名声、子孫を継承することに見い出す。この世に大作を残したいという欲求は、不死の願いの表れではないだろうか？

宇宙がこの上なく壮麗でありながら人生が不釣り合いなまでに短いことは、私達がこの世のためだけに創造されたのでないこと、来世が存在することを裏付ける。

人間の心から溢れる叫びと祈りを知っている創造者がいることを理解すること以上に大切なことがあるだろうか？

「偶然」に基づく視点は、人間の頭を覆う黒く分厚い袋のように、宇宙の壮麗さを見て取ることを妨げる。

私達は少し前まで無であったのに、今は考え、話し、喜び、悲しみ、見、聞き、嗅ぎ、味わう存在物となった。 このすばらしい超越性に揺さぶられて喜びに泣かず、飛び跳ねず、声を上げず、叫ばずにいられようか？

科学・哲学・宗教

科学の真実、哲学の真実、宗教の真実は相違し得ない。

しかし、誤った科学的認識、誤った哲学的認識、誤った宗教的認識はあり得る。

宗教と科学の関係について、まず、「どの科学、どの宗教的認識について話しているのか」と問いかけよ。

科学を通して宇宙の聞こえなかった声が聞こえてくる。
科学と宗教が共在すると、すばらしい音楽を聞くことができる。

知識の欠陥でなく、知識の高まりによって神の芸術が見えてくる。

「全ての文化に理解を示す」というアプローチを擁護する人々は、「私は私の文化に従っているので、全ての文化に理解を示すことはできない」という人に対しても理解を示さなければならないので、矛盾を免れない。

私達の内側にフィトラ（人間の天性）の証拠があり、宇宙に見事な芸術と力が顕現し、私達の手にクルアーンがありながら、どう神への疑念を抱くことができようか？

信仰のために理性を否定する者は、信仰に最大の友を失わせる。

ゴミと化した情報が溢れる現代において、哲学の最も重要な義務の一つはゴミの清掃である。

原子をどのように見るかではなく、「見る」ことがどう存在しているかということこそ、核心的な問いである。

神が創造した宇宙、与えた理性、形作した自我、送った啓典が矛盾しないことを知る者は、何と幸福なことか！

人工知能は多くの分野で人間の知能に優るかもしれないが、最も単純な認識すら模倣するできない。これは程度の違いではなく、本質の違いである。

神を語らない人も道徳心を持ち得るが、合理的な道徳的構造を証明することはできない。

物質の本質は「押す」「引く」と、「波」「粒子」である。では、「善」「美」の元は何であろうか？

「知識の唯一の源は科学であり、科学の唯一の源は観察と実験である」という者は、それすら観察と実験に基づかない哲学的意見であることがわかっていない！

「全ては疑わしい」という者は、このアプローチにより自分が疑いを抱かずに意見を述べていると気づかないまま、自分を否定している。

存在と生の秘密は、欲求に集約されている。

真実への到達は、伝統、モダニティー、名声を持つ人々を真実の絶対的な源とみなすことによってではなく、クルアーン、理性（哲学）、科学によって可能である。

人間の理性を理解することへと常に促すクルアーンは、理性を使うことを崇拝のレベルに高める。このことは叡智に最高の価値をもたらし、そうして、神のために知識を愛すると同時に、知るがために神を愛するようになる。知れば知るほど愛し、愛すれば愛するほど、神の招きによりますます知りたくなる。これは、哲学と感謝の結合である。

存在論は道徳を決定付ける。正しい存在論は宗教を通して得られるので、この原則は「宗教は道徳を決定付ける」とも解釈するべきである。

人間の本質にはなぜ、神の命令があればこそ合理的な根拠となる特徴があるのか？

神の宗教によってのみ合理的な根拠を持つ道徳的法則をもとにしながら、宗教の内容をどう批判できるのか？

無神論あるいは有神論の実存主義、ヒューム、カント、マルクス主義、実証主義、ポストモダン主義、理性を過小評価する諸宗派をもとにして、神の存在を示す証拠は歴史の埃をかぶった棚の中にあり、時代遅れであると述べることは、素朴な、もっと悪いことに無知なアプローチであり、理に適った根拠を持たないと、私は考えている。

理性に基づく証拠は、クルアーンを信じて信仰心を裏付けたいと望む者に望むものを与えてくれ、同時に、クルアーンの権威を認めない者と、人類共通の礎である理性をもとに対話するための仲介役を果たしてくれる。

思想史上、神を紹介する書物は二種類あると言われてきた。一つ目は神の啓示を含む諸啓典、二つ目は宇宙という書物であるが、これに「人間の本質」（フィトラ）を加えなければならない。この三つの書物から得られるそれぞれの結論が相互を認め合っていることは、それぞれの結論をさらに確かなものにする。

核力が相互に押し合う陽子をコアに内包していることは科学的説明により伝えられるが、この説明は、なぜ宇宙の全ての場所にある物質がこの力の作用を決定する法則に従っており、なぜそのような法則が存在しているのかの説明とは違うものである。

もし宇宙が無秩序で混沌とした空間だったとすれば、人間が赤ん坊が持つ驚きの念から解放されることはなかった。

「私の主は誰か」と問いつつ創造者との対話を求める人間の本質を創造した神が、この問いに答えないとは考えられない。

生きる欲求の対象である来世の存在が実現することは、この宇宙を超越しつつも人間の欲求を知っているほど内在的な、さらにそれを実現できるほどの叡智と偉力を持つ者、つまり神の存在を必然的なものにする。

人間の意志は存在しないと考えると、人類史上の出来事は全て無意味になる。

唯物論・無神論の存在認識では、宇宙を超越する存在が皆無であるため、無意識の物質の粒子からなる宇宙が人間に拘束力ある道徳法則を課すとは考えられない。

「なぜ様々な欲求は神の存在を信じるよう導く形なのか」というような桁違いに重要な問いへの唯一の合理的な答えは、有神論が示す。

なぜ道徳がないということがなく、道徳的な気づきがあるのか？

人間が生まれつき持つ道徳的特徴は、一つの目標へ自ずと向かうのとは違い、「善・悪」「正・誤」「正義・不正義」などの基本的概念の「気づきにより道徳的選択をする」能力を人間に与えてもいる。

人間が生まれつき持つ道徳的特徴は、道徳が幻でないことを欲する。これは、私達が神の道徳的命令を、つまりはそれを果たすための唯一の選択肢である宗教を生まれつき必要とする創造性（フィトラ）によって存在させられていることを意味する。

責任とは、意志が存在すればこそ意味がある。意志のない人間がすることと、丘から転がり落ちる岩に何の違いがあり得るだろうか？丘から転がり落ちる岩に責任を課すことが無意味であるのと同じように、意志のない人間に責任を課すことも無意味である。

宇宙と生物界で科学が説明できない隙間を見い出すことをムスリムが「宗教」のもとに求める理由はない。むろん科学によって説明できない事柄はあるが、科学によって説明できないものがあることを「宗教」に求めなければならないということはない。

進化論が正しいかどうかと、進化論がイスラムに適合するかどうかは別である。まずこの区別をつけるべきであり、イスラム的に問題とされていることを議論するのはその次である。

「ムスリムは進化論者になり得る」ということは、「進化論者でなければならない」という意味ではない。「進化論はクルアーンと矛盾しない」ということは、「クルアーンから進化論が導出される」という意味ではない。

クルアーンで非難されているファラオやアブー・ラハブは人間だが、誰もこのことを人間の尊厳に反するとみなしてはいない！人類の中にこのような者がいることを人間の尊厳に反するとみなさないのなら、生命の樹において動物との何らかの関係があることは人間の尊厳にとって問題であると、どう考えられるだろうか？

ムスリムは、預言者イエスを神格化した者達を理由にイエスへの愛を捨てることがないように、科学を無神論の道具にしようとする無神論者のせいで、神が創造した存在物を知るための最も重要な支えとなる科学を捨ててもならない。

過ちを犯すことから身を守る懐疑論と、それ自体が神聖化された懐疑論を区別しなければならない。前者の目的は真実に至ること、後者はポストモダンの戯言である。

エントロピーは
固く皮肉であり、
妥協なく確率的であり、
終わりと始まりの伝令であり、
無秩序と秩序の理由であり、
決定論と奇跡の可能性である。

エントロピーは
ある人々にとっては絶望であり、
ある人々にとっては希望である。

「この宇宙の意味とは何か」「人生の意味とは何か」「善と悪の合理的な根拠とは何か」「美しいという概念は相対的か」という問いの答えは、科学の境界を超越する。

唯物論のように、受動的で、無頓着で、無意識である物質が始まりであるとすると、物質を何兆年にもわたりどんな形で結合させるとしても、理性、意志、認識に似た要素がそこから現れることを期待する理由は皆無である。

クルアーンは科学的活動に必要な前提条件を築き、モチベーションを与えつつ、科学的努力を奨励する。

人間の内なる学びへの欲求は宇宙の研究を後押しするが、この欲求は、宇宙の研究になぜ価値があるかを証明するための合理的な根拠を示さない。

信じる過程、否定する過程に理性が影響していることを無視することも、理性主義的証拠を示せば全て解決できると思い込むことも、重大な過ちである。

神の創造した自然と神の送った宗教は矛盾しないが、人間の自然を理解する努力の表れである科学と人間が神の送った宗教から導出した神学は矛盾し得る。問題があるとすれば、それは、人間の自然あるいは宗教あるいは両方についての理解に誤りや欠陥があることによる。

無神論的進化主義によると、理性は正しいことを発見するためでなく、生き残るために生まれたものである。なので、この見解を持つ者は、自分の理性を使うことに信頼できる根拠を見つけられず、自滅する。

脆弱な理性はより深く信仰するという思い込みは勘違いである。そのような理性は迷信に陥る可能性を増やすだけである。

その他

誤った答えの呆けた追従者になるより、正しい問いを頑なに問う者になれ。

世界に挑みかかる者よ！自分を理解することはできたのか？

道徳のない国では単純な人間の言葉が深いものと認識され、小さな人間が大きな影響力を持つ。

何を知っており、何を知らないかを知りつつ知の階段を登れ。

反対方向へと疾走する者は、目標から最も遠ざかる。

幾多の暗闇がどれほど果てなく深淵であろうと、小さな光達はそれを照らすのに十分である。

現代の最大の病の一つは、表面的なものを洗練されたものと思い込むことである。

悪魔の最も価値ある兵は、価値を実践しない知識人である。

正すことが最も困難な迷信は、真実と入り混じったものである。

言葉をどう使うべきかを規定することは、集団に対する最大のヘゲモニーの道具の一つである。

言葉は金づちのようである。築くことにも、破壊することにも使うことができる。

複数の意見の中で、どの意見が正しければ今見えている状況が予期されるのか、その選択肢の中で正しい可能性が最も高い意見こそが正しい意見だと言える。

「頭を使うな！」は、人々を群集化させようとする者のスローガンである。

「友の」刃は敵の刃よりももっと鋭く、その傷はもっと深い。

物事を名付けることはそれを明らかにすることだという錯覚に陥る者がいる！

暴力を手放そうとしない者は、戦いの正当性を集団に認めさせ、彼らを敵へと駆り立てるために、あるときは「テロ」、あるときは「ジハード」をレトリックとして利用してきた。

暴力を宣伝する道具として利用されるレトリックから解放されれば、対話と平和を模索するときに立ちはだかる巨大な障害から解放される。

「真実をどう把握できるか？」ではなく「私が考える構想をどう正当化できるか？」とあがく者は、どれほど有能で口がうまくても、最後は敗者になる。

美しいと認識するものが違っても、何かが「美しい」こと、「美しい」ものが価値があり望ましいものであるという考えは、一度も交流したことのない民族同士ですら一致する。

単純な精神は、豊かな者を豊かだからという理由で崇敬する。

最大の偶像の大半は、捨てることのできない習慣である。

知られていないのに知られていると思い込まれている物事、知られていないことがわかっている物事、そしてこれら以外で知られていない物事がある。そして、知られていなかった多くの物事の中でも我々が知ることができた物事がある。我々がこれほどまでに脆弱でありながら、それらを知ることができたのは、奇跡である。

自我は、存在が最も明らかでありながら定義が最も困難である。

器に空いた穴を塞がなければ、最も激しい滝からも水をすくうことはできない。

自分が持っている物が見えていない者は、自分が持っていない物を見て嘆く。

モダニティーの最大の罪は、真実を流行の犠牲にしたことである。

メディアは人を楽しませつつ操作して洗脳を引き起こし、メディアを見て楽しむ人はそうと気づかないまま変わり続ける。

お茶を飲んでおやつを食べている間にスクリーンが作り上げる知力は、自らを取り巻くつまらなさ、無意味さ、表面的さにどう気づくことができるだろうか？

真の知識人は、時代の風に吹き飛ばされる葉になるのでなく、非難をものともせず、自らの時代が招いた暗闇を照らし出す人物となるべきである。